



# 妖怪ムシ ク

川崎ゆきお

「これは幽霊博士から聞いた話なのだがね」

妖怪博士が幽霊博士の話始める。聞いているのは妖怪博士付きの編集者。

「幽霊博士なので、幽霊屋敷へよく行く」

「そんなにありますか。幽霊屋敷が」

「幽霊が出る家を幽霊屋敷と呼んでいるだけじゃ」

「はい」

「その屋敷、屋敷と言ってよいほど屋敷っぽい。つまり、大きい。しかも周囲は庭木に囲まれ、いい雰囲気醸し出している。ここはもう何も出なくても、幽霊屋敷だろ」

「それで出たのですか」

「出たから幽霊博士が訪問したのじゃよ。依頼されてな。そこには厄介者の息子が住んでおって、これが働きもしない。ずっとその屋敷に棲み着いたまま」

「引き籠もりですね」

「さあ、それはどうか、人と接するのが苦手なだけだろう。ただ、一人暮らしなので、食べに行ったり、食材を買ってきたりと、結構外に出る用事は多いらしい。外に出る用がないときは閉じ籠もっておるだけのこと」

「じゃ、引き籠もり率は用事のあるなしで決まるのですね」

「そういう話ではなく、そこに幽霊が出たので、その青年の親が依頼してきた」

「そこで幽霊博士の登場ですね」

「絵に描いたような幽霊屋敷で、そりゃもう幽霊の一つや二つは出てもおかしくない」

「それまで、その青年は気付かなかったのですか」

「空き家にしていたので物騒だし、家も傷むので親が息子に住ませた。最近のことじゃ」

「じゃ、資産家ですねえ。そんな屋敷があるなんて」

「そうだな。親たちは駅近くのマンション住まい。まあ、先代から続くその屋敷では場所が不便なためだろう」

「じゃ、その青年が幽霊を目撃し、親に言ったのですか」

「親も子供の頃まではその屋敷に住んでいたらしい。だから、幽霊が出るようになったのは、その青年が一人住まいを始めた頃からだろう」

「それで幽霊博士の活躍は、どんな感じだったのですか」

「幽霊博士は慣れたものなので、よくある現象として処理しようとした」

「錯覚か何かなんでしょ」

「しかし、これは本物だと判断したようじゃ」

「音がするとか」

「いや、ラップではなく、姿が見える」

「青年だけではなく、幽霊博士も見たのですか」

「そうじゃ。だから、これは怖くなってきたようだ」

「青年の錯覚ではなく、二人とも見たわけですから、これは客観性がありますねえ」

「ただ、薄ぼんやりとした煙のような白いものでな。何かよく分かん」

「湯気でも立っていたんじゃ」

「温泉じゃあるまいし」

「そうですねえ」

「廊下や部屋の隅で、その白いものを何度も見たとか」

「それは本物じゃないですか」

「こういうものには原因があるはず。しかし、何十年もそんな幽霊は出ていない。だから、最近入り込んだ幽霊ではないかと博士は考えた」

「はいはい」

「それは最後まで分からずじまいだったが、幽霊はもう出なくなった」

「幽霊博士が何らかの処置をしたのですね」

「いや、幽霊博士はただただ怖がっていただけで、手柄を立てたのはその青年なんだ」

「ほう」

「青年はものすごく恐がり、幽霊が出てからは、何を見ても怖がった。ドアを開けたときに、そこにいるのではないかと、出会い頭、いきなり出るのではないかと、神経を常に尖らせていたんだ」

「その青年が解決を」

「幽霊博士もその現場を目撃している」

「じゃ、その青年がゴーストバスターなんですね」

「まあ、そうじゃが、そういう資質はない」

「じゃ、どうやって」

「博士と青年が部屋で話していた。青年はトイレに行きたくなかったので、部屋から出ようとした。トイレはさっき入ったばかりなのに、これはおかしいと思ったのじゃが、そのときは冷たいお茶を何杯も飲んでいて、きっとそのせいだろうと、気にもとめずにドアを開けようとした。これは幽霊談ではよくあるのじゃが、誘われたのじゃよ」

「はい」

「それでドアを開けたとき、目の前に真っ白な顔をし、目が赤い女が立っていた」

「白いもやではなく、はっきりと見えたのですね」

「青年の髪は逆毛立ち、倍ほどの頭のボリュームになった。眼球は見開き、目玉が落ちるほど。叫び声は非常に高い高音で、いわゆる金切り声で、爪で金物をこすったときのような不快な波長じゃ。叫びすぎたため顎がはずれたのか、顔が倍ほどの長さになっていた」

「ショック死しますよ」

「それを見た幽霊は、逃げ出した」

「え」

「幽霊博士によると、青年の顔があまりにも怖かったためとか」

「ほう」

「気の弱い幽霊でよかったという話じゃ」

「それは幽霊博士の作り話じゃないのですか」

「さあ、それはどうか。幽霊博士は、その幽霊を見て腰を抜かし、さらに青年の顔を見て失神したらしいから、本当の話かもしれん」

「はい」

「私は、この青年が妖怪ではないかと思ったりした」

「何という名の」

「妖怪ムンク」

「叫んだ顔で有名な画家ですね」

「驚き、叫びすぎたため形相が変化しすぎたんじゃ」

了